

20 世紀初頭のカナダにおける日本庭園

The Japanese Gardens in Canada of 20th Century Beginning

河原 典史

Norifumi KAWAHARA

1. はじめに

初めてカナダへ移住した日本人は、長崎県南高来郡口之津(現在の長崎県南島原市)出身の永野萬蔵である。1877 年(明治 10)に渡航した彼は、やがてブリティッシュ・コロンビア州(以下、BC 州)の州都・ビクトリアで美術商を営んだ。1888 年(明治 21)には、和歌山県日高郡三尾(現在の和歌山県美浜町)出身の工野儀兵衛がフレーザー川河口のスティーブストンに渡り、彼の呼び寄せにより和歌山県から多くの人びとが出稼ぎを行なった。彼らは欧米資本のキャナリー(サケ缶詰工場)に雇用され、ボウシンと呼ばれる先住の親方のもと、漁業ライセンス(漁業権)を持ったフィッシャーマンとしてサケ刺網漁業に就くことが多かった。また、1896 年(明治 29)以降では、湖東水害によって滋賀県東部からも多くのカナダ移民が輩出された。彼らはカナダ西岸の最大の都市・バンクーバーに連立する製材所に勤め、やがてリトル・トーキョーと呼ばれたパウエル街で商業に転出する者も多かった。その他、伐木業、炭鉱夫や鉄道工夫などとして従事する日本人も少なくなかった。

このように、BC 州において日本人移民がさまざまな生業で、その民族的な地位を築き始めていた 1900 年代初頭、ビクトリアには 4ヶ所の日本庭園が築かれ、バンクーバーにも日本庭園の造園計画があったことは、あまり知られていない。本稿では、看過されてきたカナダ日本人移民史のページを紐解き、歴史的遺産として現在でもその一部が継承されている日本庭園の造園の経緯をめぐる模索と挫折を紹介する。

2. ビクトリアの日本庭園と岸田伊三郎

1843 年、ビクトリア郊外の Gorge 水路岸に、ハドソン湾会社はゴージ・パーク(Gorge Park)を開園した。BC 電気鉄道会社により、1906 年に各種施設が設けられたこの公園へは、ビクトリア中心部からトロリーバスが運行された。多くの観光客はボート、ピクニックや水泳などを楽しみ、やがて園内電車やメリーゴーランドなどの遊戯施設も設置された。

1898 年(明治 31)に横浜市北方町(現在の横浜市中区)で生まれた岸田芳次郎と、広島県安芸郡仁保島村向灘(現在の広島市南区)出身の高田隼人の 2 人は、この園内に資本金 5,000 ドルで 1.5 エーカー(約 6,070m²)の土地を 10 年契約で借用した。1898 年(明治 31)にビクトリアへ渡航後、1903 年(明治 36)頃に再渡加した岸田は、ホテル勤務やレストラン経営などで成功を収め、ビクトリア・ユニオンクラブ会員になっていた。ゴージ・パークに日本庭園を開園するため、岸田は父・伊三郎を呼び寄せた。1842 年(天保 13)に生まれた伊三郎は、1907 年(明治 40)4 月 6 日に横浜港を発ち、19 日にビクトリアへ着いた。息子・芳次郎とその盟友・高田の新しい事業のた

め、65歳の高齢であった伊三郎は太平洋を渡ったのである。

1907(明治40)年2月に着工、7月に完成した日本庭園には2棟の喫茶室、3ヶ所の小池には金魚や鯉が放され、築山をとりまく簾の迷路には石灯笼や長椅子とともに、盆栽が配された。球戯場も設けられ、木製の玉を羽子板(?)で打っての穴に入れると景品がもらえるという Japanese Ballgame が楽しまれたようだ。喫茶室のメニューには、コーヒー・紅茶・ココアなどの飲料、パン・パイ・サンドイッチ・スープの食事ほか、アイスクリームなどのデザートが記され、ダンスパーティーへの配膳もあった。ここは、日本人が鑑賞する純粋な日本庭園ではなく、現地の白人が異文化としての日本文化を疑似体験する場所であった。Tearoom は茶室ではなく、まさに喫茶室だったのである。

ゴージ・パークの日本庭園に設置された植木や石塔などは、岸田親子の出身地にある株式会社横浜植木商会から輸入された。同社は、1890年(明治23)に創立された日本最初の植物類輸出入業者である。この庭園の評判によって、伊三郎は1908年に手掛けたバーナード(Barnard・当時のBC州副知事)邸、1909年ハトリ・パーク(Hatly Park・Dunsmuir 邸・現在のロイヤル・ロード大学)、そして、1910年のブッチャート・ガーデン(Butchart Gardens)にも日本庭園を造園した。これらにも、同社からの植木や石塔などが使用されたといわれ、その一部は現存している(写真)。



写真 ビクトリアのハトリ・パーク(Hatly Park、現在のロイヤル・ロード大学)に保存されている日本庭園(一部・改修):池の中央には、横浜植木商会株式会社から輸入された鶴の置物がある(2008年10月 河原撮影)

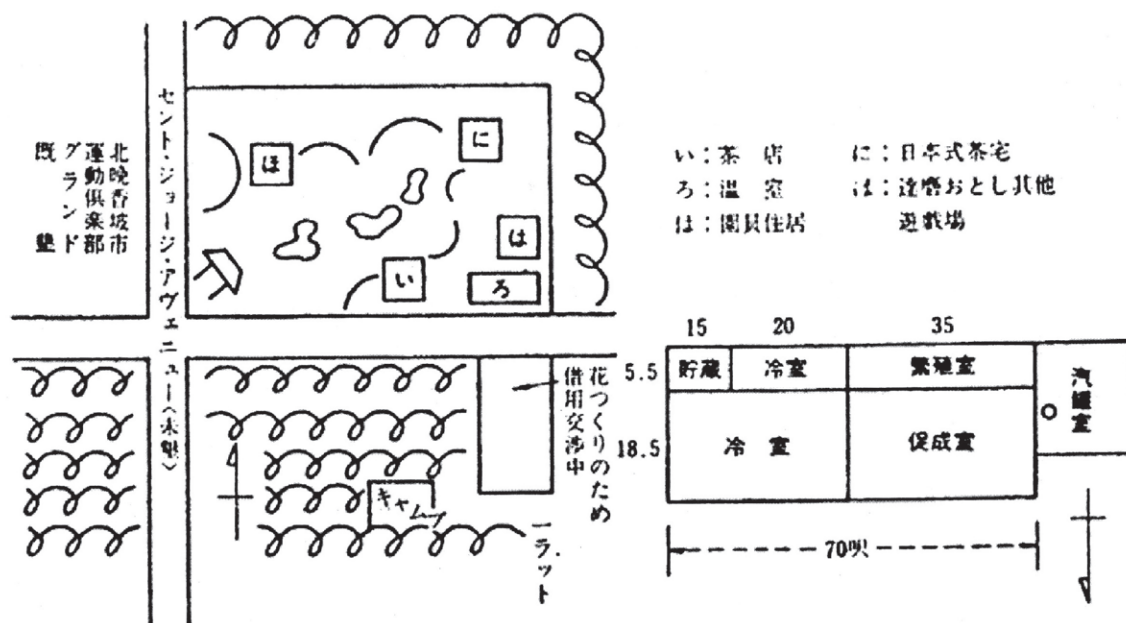
3. バンクーバーにおける日本庭園の模索

広島県安佐郡三川村古市(現在の広島市安佐南区)出身の角佐六は、1898(明治 31)年にバンクーバーへ上陸した。漁業や山林伐採業へ従事して一時帰国した彼は、再入国後にバンクーバーで建設・石炭・保険業などを営む富豪のアーネスト・E・エヴァンス(Ernest Edward Evans)邸の花園監督者になった。興味深いのは、後に生物学者・社会主義者として名を馳せる山本宣治が、一時この花園で働いていたことである。山本の日記からは、当時のバンクーバーにおける園芸の様子が垣間みられる。例えば、園丁長(ガーディナー責任者)の角以外のガーディナーは全員白人であったほか、ガラス温室ではバラやゼラニウムなどが栽培されていたことが記されている。山本宣治、通称・山宣の渡加をめぐっては、カナダ日本人社会の重要人物が頻出する。1889年(明治 22)年、京都市新京極のアクセサリーショップを営む山本亀松・多年夫妻の一人息子として生まれた山宣は、バンクーバーの眼科医であった親族の石原明之助(京都市西洞院高辻出身・京都府立医学校卒業)の誘いで 1907年(明治 40)に渡加した。幼少期から園芸に親しみ、園芸見習として大隈重信邸への住み込みも経験していた山宣は、バンクーバーの有力紙・プロヴィンズ誌(The Daily Province)の求人欄にガーディナー募集の広告を掲載した。やがて、石原の義兄であるバンクーバー日本人教会初代牧師・鏑木五郎(千葉県香取郡山倉村新里(現在の香取市)出身)の紹介で、彼は先述したエヴァンス邸で角園丁長のもとで働くのである。

そのころ、鏑木を中心とする日本人グループは、北バンクーバー21番街に1.5エーカーの荒地を入手し、日本庭園の造園を画策していた。1908年になると、彼らは1口・10ドルで3,000株を募集し、資本金3万ドルの日本庭園会社の設立を計画した。社長に就任した鏑木は、山宣を同社の事務主任に命じたのである。山宣の日記(1908年2月3日)には、以下の記述がある。

「ヴィクトリア市の公園に日本人の庭園既に設けられ候。其園主を主なる設計者として西洋人のガーデン・ランズスケープ・アーチテクト(園設計技師)の補助を受け傍ら小生などの意見を参酌するといふのに候」

つまり、ゴージ・パークに岸田伊三郎が造園した日本庭園の評判はバンクーバーの日本人社会にも知れ渡り、山宣は彼に設計を依頼しようとしていたようである。また、日記や手紙からは、開墾にあたって宮城県出身の畠山なる人物に請負ってもらい、池や築山を造り、茶店や達磨落しを楽しむ遊戯場のほかに温室を一棟建て、そこでトマト、イチゴやカーネーションの促成栽培をする計画もあったことがわかる。そして、ボタンやシャクヤクなどの草花を横浜植木株式会社から購入する予定も判明する。つまり、当時のBC州で求められていた日本庭園には一定のデザインがあり、それを伊三郎と横浜植木株式会社を通じて、山宣はバンクーバーにも実現しようとしたのである(資料)。



資料 山本宣治が設計した北バンクーバーに日本庭園(1908年7月19日 花やしき宛書簡:
 佐々木敏二・小田切明徳編『山本宣治全集第6巻:日記・書簡集』不二出版、1979)

ただし、実際にゴージ・パークの日本庭園を見学した山宣は、日記(1908年8月25日)に以下の感想を綴っている。

「ヴィクトリアの日本庭園はよく出来ていると晩香坂の人々の評判につき行ってみれば、いやはやゝ丁度活人形の見せ物の人口の如し、猫の額の如き所へ芝居の道具立ての様な和洋の欠点ばかりを混合(折衷にあらず)の建物や八幡しらずく出口のわからないような藪>、土も耕さずに木をチョコチョコとうゑ、竹垣で囲ふてある。」

「一つは右の庭園、一つは海中に屋形船を設け、朱塗りの橋をかけ、船にて茶を売り、此方は多少趣味の高尚なる人々の経営と見え感心する点多く候ひき。」

つまり、多少なりとも日本で園芸の研鑽を積んできた山宣にとって、伊三郎が造園し、自分自身も同類の設計をしたものの、眼前の日本庭園は思い描いていた伝統的なものではなかったであろう。

ところで、バンクーバーでは日本庭園の造園はうまく進まなかった。社長の鍋木ほか、副社長の信夫千代治(宮城県登米郡石森村(現在の宮城県登米市)出身)、会計の胎中楠右衛門(高知県安芸郡安芸町(現在の高知県安芸市)出身)と堀田佐六(広島県安佐郡山本(現在の広島市安佐南区)出身)が連名で日本語新聞『大陸日報』へ株主募集や資金納入、さらには株主総会の開催を呼びかける告知を掲載したが、それらは順調ではなかった。また、整備されたゴージ・パークの一角に日本庭園の造園が可能であった伊三郎と異なり、山宣は開墾から始めなければならなかった。さらに、ダイナマイトの使用や水道敷設の請求のため、市役所での手続きも必要であった。

前年の1907年に起こったバンクーバー暴動をはじめ、当時のバンクーバーでは日本人に向け

られた白人の視線は厳しかったに違いない。そのなかで、園芸経験があるとはいえ、20歳にも満たない山宣を事務主任に就かせ、設計から実際の造園、いやそれ以前の開墾手続きまで任せるという日本庭園計画は無謀であったと言わざるをえない。やがて山宣はこの任務を離れ、スティープストーンでのサケ漁業に従事したのち、アメリカへ移ったのである。

4. おわりに

ホースシュ・ベイ(Horseshoe Bay)沖に浮かぶボウエン島(Bowen Island)にも、わずかながら日本庭園があった事実にも触れておきたい。1920年代、ユニオン蒸気船株式会社(現在のBCフェリーの一部)による同島の観光開発のひとつとして、港湾を見下ろす丘陵に日本家屋型の喫茶室、河川沿いに遊歩道と太鼓橋が建設された。これを担ったのが、古賀大吉(佐賀県三養基郡北茂安村(現在の佐賀県三養基郡みやき町)出身)を中心とする日本人であった。彼らのなかには、鉱産資源開発への従事者としてこの島へ移り住んだ日本人もいた。このように、第二次世界大戦前のBC州では現地のカナダ人の娯楽のひとつとして、日本庭園が一定以上の評価をうけていたのである。

1900年代初頭のBC州では、日本庭園への模索が繰り返されていた。1907年には、日本人移民の増加に反対したバンクーバー暴動が勃発し、翌年には移住制限となるレミュー協定が設定された。このような情勢にもかかわらず、BC州では日本庭園への興味は高かったようである。それは、欧米各地で開催されていた万国博覧会での日本庭園の出品からもうかがえる。前述した横浜植木商会は1910年(明治43)のイギリス・日英博覧会や、1912年(明治45)のイギリス・ロンドン万国博覧会に日本庭園や盆栽などを出品している。ビクトリアにおいて岸田伊三郎が手掛けた4ヶ所の日本庭園、山宣が計画していたバンクーバーの日本庭園もまた、これらの博覧会と同様に、カナダ社会への日本文化の紹介と位置づけられよう。現在では一部しか残存していた日本庭園については、歴史的遺産として保存の必要性を呼びかけていかねばならない。

謝辞

岸田伊三郎氏の渡加とビクトリアでの日本庭園の造園についてご教示いただいた、伊三郎氏の曾孫にあたる竹安美史氏、ならびにローヤル・ロード大学のポール・アリソン氏と、横浜開港記念館の平野正裕氏に感謝いたします。

参考文献

河原典史「カナダ・バンクーバーにおける日系ガーディナーの先駆者—高知県宇佐出身の山本省之助・半次兄弟—」、土佐地域文化 10、2006

大陸日報社『加奈陀同胞発展史』、1909

大陸日報社『加奈陀同胞発展 附録』、1922

佐々木敏二他編『山本宣治全集第6巻:日記・書簡集』不二出版、1979

D.Minaker :*Canadian Cataloguing in Publication Date*,1998

Toyo Takata, *Nikkei Legacy*, NC Press Limited, 1983